

物くさ太郎の口説

青 木 晃

たへかたや。

(以上、絵中の詞)

住吉、くらま寺、五条の天神、
きふねの明神、ひよしさんわ
う、祇園、きたの、かも、かす
が、所々にてまいるあひて候ひ
しは、いかに〜。

(一)

備濃国の物くさ太郎はむつくと起き上つて都へ上り、まめなる態にて長夫を勤めおえた。そして、再び園へ下る前に、よき女房よと妻を求めて辻取りに清水寺門前へ出で立ったのである。終日立ち尽して日も暮れ時、年の頃十七八のすばらしき女房を見つけた。物くさ太郎は女房のそばにつつと寄り、笠の内へ面さし入れ、腰に抱きつきて口説に及ぶ。

△大阪女子大蔵絵巻▽

いかにや上らう、はるかにこそ候へ。あふはら、まつはら、せれうの里、さか、ほうりんじ、うつまさき、きをん、清水、かも、きふね、やわた、すみよし候、よとはしにてあいまいらせしは、いかにや。

△渋川版御伽草子▽

いかにや女はう、はるかにこそ候へ。をはら、しづはら、せれうのさと、かうだう、かはさき、中山、ちやうらくじ、清水、六はら、六かくだう、さか、法りんじ、うづまさ、だいで、くるす、こはた山、よど、やはた、

古態を云われる大阪女子大本絵巻と、渋川版御伽草子本のそれとを並記し、単純に地名の一致するものに筆者において傍線を付してみた。他に、おたかの本地系古刊本には、「五条の天神」と「きふねの明神」との間に「いつもち」が挿入される程度の異同で、御伽草子本に一致している。

ところで、この口説の意味をどう解し、位置づけたらよろしいのか。前後不整合にて意の解しにくいところなどと云われたりしているので、ここに私の試解を記してみたい。その前に、「いつもち」を注しておく。

△出雲路▽『源平盛衰記』に「賀茂河原西、一条北辺におはする出雲路の道祖神」とあり、出雲社へ通う路から出た地名。古く『和名抄』に愛宕郡出雲郷とあり、後世出雲郷の北部を小山郷、その南を出雲路といったらしい。それぞれに上御霊社、下御霊社が存した。現京都市上京区、それより東、賀茂川に出雲路橋が架かる。

現在の「出雲路」を京都地図帖の上に知ることが、物くき太郎の口説を解する糸口になるだろうか。

大島建彦校注・訳『御伽草子集』(小学館・日本古典文学全集36)にみるに、「小原、静原、芹生の里、……」以下地名等を漢字表記に改めて一目瞭然にしながら、なおその一々に現在の大きっぱな所在を示して、「以下は名所尽し。多くは神社や寺院の名をあげる。」というのみである。それを口にして、よき女房に口説きかかろうとする物くき太郎の意図、それ即ち物語作者の意図は一向にわかってこない。

市古貞次校注『御伽草子』(岩波書店・日本古典文学大系38)は、漢字表記にしてセットを組み語調のリズムをとらえるようにしながら、初めの三項ほどに注をほどこして、「以下は京都付近の地名、寺社名を列挙したもの。中世の道行文などによく出てくる。」と解説を付した。この代表的な二注釈書を見る限り、この口説は意の解しにくいところといわざるをえず、而して大島氏は市古氏注のさらに改悪とみなされそうである。

市古氏は、「小原静原芹生の里、草堂河崎中山、長楽寺、清水六波羅、……」とセットを組んで語調のリズムをとらえようとし、こ

の列挙は中世の道行文などによく出てくるとしたのである。この読みを更に推し進めると、突き抜けたところに何かが見えてくるはずだったのだと私は考える。それは、小歌の世界である。

淀 芋洗(口)
 よと いもあらひ竹田のさと 松に花あるふちのもり 稲荷
 いま熊野 六原八坂やさかちやうらくし 松園長楽寺 北白川
 菟原菟原 嵯峨太秦 きてふなをかせれうやせのさと 鞍馬
 しはらさかうつまさ 東寺よつつかかつらの里 古山古山陰や
 から寺 その夜のうちに京入する めん／＼のともし火たい松は
 都のうちにくまなし あはた口より三条までは すきまなふこ
 が見えにけれ ものに能々とふれは よし野たつたのはな紅葉
 の色めきあへる風情なり

「都あたり(京入の内)」
 元和五年幸若小八郎自筆本と称するものから書写したと奥書する幸若歌謡の本(『小舞集』と仮称して、帝塚山短大「青須我波良」第四号に筆者翻刻)にある一曲である。慶長・元和・寛永の頃幸若小八郎家の大夫の手で作られた『小舞集』数種の現存が知られていることなどからして、これら「さわり」集の盛行、人々の小歌愛好の様を推察することは可能であろう。そこで、大阪女子大本との地名一致六、御伽草子本になると一一に増えるなどと数だけを云うの

ふはなくて、都あたりの名所づくしは京入りする地方の人々のあこがれの表現であり、それを歌う語調（リズム）は多くの人々に好まれ愛され口ずさまれたのだという時勢粧をふまえるべきと考える。

また、「閑吟集」をみよう。

面白の花の都や

筆で書くとも及ばじ

東には、祇園 清水

落ち来る滝の、音羽の嵐に

地主の桜はちりちり

西は法輪 嵯峨の御守

（下略）

放下師の歌ったこの名高き小歌も、ここに掲げた前半部は京の名所づくしで、当時花の都とは東は音羽の峰から西は嵯峨・嵐山までを眼中におさめているのである。それに、かの幸若歌謡では南と北も限られ、しかしてこれらは手近かな二例にすぎぬ。

物くさ太郎が、かの口説の京の名所を全てめぐり歩いたと説く人はいなからう。それは言葉を重ね、リズムを楽しみながらの、言葉遊びの世界なのである。これぞわが女房と心に決めた人に出会った彼は、「いかにや女房、はるかにこそ候へ。」と語りかけ、次に、

耳になじみ快い語調での名所づくしの歌をうたう。それは当世流行の小歌の替歌のようなもの、それを真面目な顔で口説きの科白に使う物くさ太郎の姿に、当の女房も、多くの読者もつい笑い出したことであろう。そういう仕組みに作られている。作者の趣向がそこにある。しかも、「都あたり」の名所づくしは、「京入り」する地方の人々のあこがれの表現であると私は前に云った。

物くさ太郎の口説を聞いた女房は、

「このものはいかさまいなかの物にて有を、やとのおとこつちとりせよといつてせさするよ。」

△大阪女子大本▽

「此者はいかさまにも、ゐなかの者にて有けるを、やどのおとこのをしへて、つじどりをせよと申てせさするよ」

△浜川版御伽草子本▽

と、自然に直ぐに判断できたのである。

(三)

かの女房は、物くさ太郎の口説を「よまい事」△大阪女子大本▽と聞き、「あれ、**姉の者**をば、すかさばや」△御伽草子本▽と申って最初はなぞかけ、遂には歌問答へと入っていくのである。

女房の最後に残した歌、

こひしくはたつおてきませへ大阪女子大本
おもふならとひてもきませわがやどは

からたけうはうへ前朝
からたちばなのむらさきのかど さとへ前朝

が、謎解きの趣向を加味された女の招婿歌であるという浅見和彦氏の説解は肯首しうる。

「物くさ太郎」は、随所に趣向を凝らされた作品である。今その一例として、清水門前における求婚の口説に、流行の小歌をうけての替歌的世界構築の趣向をみた。それはパロディの世界ともいえる。後に続く求婚場面のなぞなぞも、歌問答も、パロディの世界である。人々は、直感的に、あるいは知的に、その趣向を読み解いて（読んで聞かせてもらった人も）笑ったはずである。初めは小歌の如き小さな名所づくしから、後には他のはやり歌の名所も同じリズムの型の中に取り込んで、大きな名所づくしへと育っていったことは容易に考えられる。そして、その積み重ねの執拗さが更なる笑いを呼んだのであつたらう。冒頭の二本上下並記にそれを見る。

かようにして、「物くさ太郎」における物くさ太郎の口説の、各地名社寺名の現在地等解説は全く無意味なものであるを知る。それ全部、総体としての小歌風世界のパロディ性に笑えばよろしいのである。従って、その直訳など意味がない。

一方で、この作品が「にせ御伽草子」として近世小説のさきがけをなすかとの立論もあつて興味深いが、今私に見えるのは、小歌の最隆盛期の明るさの中で、あるいはそれ以降の頃に仕組まれたパロ

ディの世界がこの作品だということである。小さな部分から全体を見て、そう考えている。

補記：横山重氏により、不思議なることありとして紹介された幸若舞曲「日本記」の一節混入の一本も、同工趣向として説解されよう。また逆に、私の云う如き趣向ありとの一傍証にもなりえようか。